大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

40

黒川道祐
奈須恒徳

名著出版刊

NANJING UNIVERSITY OF CHINESE MEDICINE
南京中醫藥大學
1954
南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 40
黒川道祐
奈須恒徳
第II期
全30巻

昭和五十六年八月二十五日　発行

編者　大塚敬節
　　矢数道明
発行者　中村安孝
発行所　株式会社　名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番(代)
振替口座　東京七―一〇五四四番

予約限定版

製版所　株式会社　日本写真製版社
印刷所　有限会社　伊藤印刷
製本所　辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347―0891―8324

責任編集

大塚　敬節

矢数　道明

編集委員

山田　光胤

寺師　睦宗

大塚　恭男

矢数　圭堂

松田　邦夫

凡　例

一、本書第四十巻には、『本朝医考』『本朝医考補遺』（黒川道祐）、『本朝医談』『本朝医談二編』（奈須恒徳）を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、版本の場合、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。但し、写本の場合はその限りではない。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

本朝医考　版本　三巻一冊

本朝医考補遺　京都大学医学図書館所蔵写本　一冊

本朝医談　版本（文政五年版）　一冊

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

本朝医談二編　版本　一冊

一、解説は大塚恭男（北里研究所附属東洋医学総合研究所研究部長）が執筆した。

黒川道祐

大塚恭男

黒川道祐は名を元逸（玄逸）といった。道祐はその字である。静庵、遠碧軒、梅林村隠等と号した。父の名は光信である。道祐は儒を林羅山に学び、医を堀正意に学んだと伝えられる。

道祐の医学上の師であった堀正意は服部敏良氏の『江戸時代医学史の研究』によると道祐の外祖父にあたる。堀正意は字を敬夫といい、杏庵と号した。近江の人で、曲直瀬正純のもとに医を学んだ。また藤原惺窩について儒を学んだ。初め芸州侯に聘せられたが、正意の名を聞いた尾州侯が特に芸州侯に請うて正意を尾張に迎えた。のち法橋から法眼に進んだが、寛永一九年（一六四二）に五八才で没した。

道祐の生年は明らかではない。服部敏良氏の前出書によると、元禄四年（一六九一）に七〇才

で没しているので、これより逆算すれば、生年は寛永九年（一六三二）ということになる。なお、服部氏の説の根拠は示されていない。

堀正意の没年が一六四二年であることは確実であるので、仮に道祐が一六三二年の出生ということであれば、道祐が一一才の時に正意は没していることになる。「正意に就いて医を学んだ」というには、やや若過ぎるのではないかと思われる。

ともかくも道祐は業成ったのち、芸州侯に医を以て仕えたが、ほどなく辞して、京都に移り住むに至る。京都での道祐の生活は詳らかではないが、寛文三年（一六六三）には、『本朝医考』を完成している。

道祐と極めて親交の深かった貝原益軒は、寛永七年（一六三〇）に福岡で生まれている。早くから儒と医に志のあった益軒は、明暦三年（一六五七）京都遊学を命ぜられ、寛文四年（一六六四）まで同地に滞在する。恐らくは、この間に道祐と益軒は知り合い、生涯を通じての友情が育くまれることになったのであろう。

益軒の京都遊学中の交友の中には、中村惕斎、向井元升らとともに黒川道祐の名があげられていることは注目に価いしよう。益軒は儒家であるとともに、『養生訓』や『大和本草』の著者として知られる医師であり、本草家であった。中村惕斎は『訓蒙図彙』の著者として知られるエンサイクロペディストであり、向井元升は『庖厨備用倭名本草』の著者であり、益軒をして「都下の

名医向井元升翁は余が故友なり。その著わすところの庖廚本草、国字を以て食性を記すこと詳なりとなる。この書『大和本草』の中、頗るこの翁の説を採用す」といわしめた碩学である。そして、黒川道祐は『本朝医考』の著者であるとともに、彼の本草に関する見識をうかがうに足る『雍州府志』の著者でもあり、また遠藤元理の『本草弁疑』に序をよせてもいる。因みに、道祐の著作として『本草弁疑』をあげてある書物が散見されるが、これは誤りで、遠藤元理の著書に道祐が序を記していることから生じた誤解であろう。

『本草弁疑』に寄せた道祐の序は、短文ながら、彼の本草ないし医療に関する考えを端的にあらわしていると思われるので、以下に読みくだし文として紹介してみよう。「本草弁疑序　それ物に善悪あり。人に真贋あり。これ世の常なり。善悪、真贋、その繋るところ甚だ重くして、至りて択ぶべきものは薬品これなり。洛下の薬舗、遠藤元理は薬を知ること至りて明にして、品を択ぶこと至りて精し。遂に法製して人の求めに応ず。世に成薬店の始めと称す。近ごろ書を作りて予に示す。開きてこれを見れば、則ち一薬ごとに倭漢を分ち、善悪を弁じ、真偽を択ぶ。その論、以てこれをとるにたれり。予が一語をその首に弁ぜしめんことを請う。つらつら思うに、まさに今、太平の日久し。物として備わらざること無し。ただ採薬の人を欠くことを恨む。今、この人ある時は、則ち遠く中華に求めずして、本朝に自ら採薬の眼あり。しかる時は則ちその功少しとなさず。予もまた治療を事とす。その医家に助けあらんことを嘉し、いささかこれが序をなして

その請を塞ぐ。延宝九年秋之季。白雲邨にて病夫黒川道祐記す」。

これよりすれば、道祐は延宝九年（一六八一）当時、生業として医に従事していたことや、京都白雲村に在って病を養っていたことなどが知られるが、本草に関しては、知識としても、実際上の面でも一家言をもっていたことが推測される。

京都を舞台としたこれら本草家ないしはエンサイクロペディストらの交流が、この時代にこの分野での百花斉放とも云うべき豊富な業績を生みだした原動力となったことと思われる。そして『本朝医考』の著述自身も、このような時流——百科全書派時代と呼んでもよいようなムード——と無関係ではあり得まいと思うのである。

井上忠氏はその著書『貝原益軒』の中で、「道祐は人見元徳の兄」と記している。人見元徳は初め宮中御用の医師であったが、小児科医として令名が高く、のちに将軍家の息女千代姫の病気の際、幕府に招聘されて治療にあたり、以後医を以て幕府に仕え、法印に叙せられ、随祥院の院号を賜わった当代屈指の名医であった。そして、その次男の必大は『本朝食鑑』の著者として知られる。しかし人見元徳は慶長九年（一六〇四）に生まれて、天和四年（一六八四）に没しているのであって、道祐が元徳の兄であるという関係は考えにくい。井上氏は前出書の中で、別に「人見元徳の『本朝食鑑』云々」とも書いておられるが、前述したように『本朝食鑑』は元徳の次男必大の著書であり、この辺に事実の誤認があるように思われる。それでは「道祐は必大の兄」で

あろうか。必大の実兄であり、元徳の長男であるのは友元であり、ほかに実兄はない。あるいは両者は義兄弟の関係であろうか。この点に関しては後考を俟ちたいが、もし井上氏の云われる如く、道祐と人見必大との間に何らかの縁戚関係があるとすれば、興味深い。

道祐は元禄四年（一六九一）一一月四日、京都で没した。京都市上京区浄福寺通五辻上ル、本隆寺中、本法印墓地に墓がある。

道祐の主要著書としては、本書に収載した『本朝医考』のほかに、次の数点が知られる。

『雍州府志』 十巻、貞享元年（一六八四）刊。山城国の地誌。その巻之六、土産門上には、薬品、雑菜、竹木、諸菓、雑穀、魚鳥、造醸、土石の八部に分ち、山城国およびその周辺の天然物に関する詳細な記載がみられる。

『日次紀事』 一巻、抄写本で伝えられ、大正五年京都叢書刊行会で活版刊行。道祐が京都白雲村に隠棲中に書き記したもの。朝廷の礼、城中の事、宮社の儀、寺観の務を記した京都歳時記。

『芸備国郡志』 三巻、抄写本。道祐が芸州侯に仕えていた時、命を奉じて撰述したもの。

『遠碧軒随筆』 四巻、抄写本で伝えられたものが近年活版刊行された旨が『芸備医史』に記されている。天文、地理より人事百般に至るまで、随聞随筆したもの。

『本朝医考』

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

黒川道祐の主著で、本邦における医史学書の嚆矢である。上中下三巻よりなり、寛文三年（一六六三）に刊行された。巻頭に林家二代で羅山の三子、向陽軒林鵞峰の序がのせられている。「芸陽の医官法眼黒川道祐、国史を窺い、旧記を考え、演史を猟り、小説を択び、禅徒の残藁を閲して、医家の出処、術業および叙位、産薬等の事を抄す。且つ近世聞見するところを加えて、聚めて三巻となし、本朝医考と号す（原漢文）」と本書成立の経緯を述べ、「今より後、医家の典故はそれ祐に問わんのみ」と道祐の功を讃えている。

上巻は大己貴命より細川勝元に至る人物について述べ、中巻は和気広世より目医に及び、下巻は国史上の医事に関することを列挙している。

『本朝医考補遺』

京都大学医学図書館の富士川文庫中に本文二一帖からなり、表紙に『本朝医考補遺　蘭軒翁自筆』と記された抄写本が蔵されている。本書の性格は右以外に知る手がかりがないが、幕末のすぐれた考証学者であった伊沢蘭軒（一七七七―一八二九）が、黒川道祐の例に倣って『日本後紀』、『続日本後紀』中の医事に関する条文を抄出して『本朝医考補遺』と題したものであろうか。冒頭の「桓武紀延暦十五年冬十月壬戌遊猟於大原野始置典薬寮史生四人造酒司史生二人」の条文は、延暦一五年（七九六）に初めて公的機関に史生すなわち医史の専従者をおいたものとして、注目に価

いする。

〔参考文献〕

●服部敏良　『江戸時代医学史の研究』吉川弘文館・昭和五三年
●京都府医師会　『京都の医学史』思文閣出版・昭和五五年
●上野益三　『日本博物学史』平凡社・昭和四八年
●貝原益軒　『大和本草』（春陽堂・昭和七年本）
●遠藤元理　『本草弁疑』（漢方文献刊行会・昭和四六年本）
●人見必大　『本朝食鑑』（平凡社東洋文庫本）
●井上忠　『貝原益軒』吉川弘文館・昭和三八年

奈須恒徳

大塚恭男

奈須恒徳は字を玄蚩と称し、柳村と号した。安永三年（一七七四）江戸に生まれた。本姓は田沢氏である。その先祖は出羽国山本郡小泉の田沢城主田沢越前守安倍常直の長男で田沢清雲道賀というものである。道賀は慶長中（一五九六～一六一五）に京都に上り、曲直瀬玄朔の門に入って医学を修めた。その後、豊臣氏に仕えたが、豊臣氏滅亡後の元和中（一六一五～一六二四）に徳川秀忠に仕え、家光の時に法眼に叙せられた。その子が清雲意春、以下、道徹之達、宗伯長歳、宗伯安久、玄丈保久と継嗣されたが、その間六代にわたって幕府の医官を勤めた。五代目安久の次男が宗之恒徳で、寛政四年（一七九二）九月二八日に同じく幕府医官である奈須玄真恒隆の聟養子となった。

養家の奈須氏は大塔宮の後裔と云われ、家系によれば式部少丞家恒が明応元年（一四九二）に越前守に任ぜられたのが始まりで、世々外科を業とした。恒昌に至り、弱年時に曲直瀬一渓道三に入門して医を学び、寛永一〇年（一六三三）に秀忠に謁し、同一五年（一六三八）一二月朔日召されて御医師となり、玄竹と号し、久昌院と称した。正保四年（一六四七）には法眼に、さらに万治二年（一六五九）には法印に進み、延宝七年（一六七九）二月二七日没している。著書に『医方聚要』、『薬方彙纂』がある。

玄竹によって奈須家の基礎が定まり、代々久昌院を称した。恒子、良音、良種、恒隆と継嗣されたが、五代目恒隆は家業未熟と行跡不良のため、小普請に貶され、邸地没収、出仕さし止めとなったが、寛政四年（一七九二）に許された。恒隆に嗣子がなかったため、西田氏の男を養子としたが、いくばくもなく家に帰ったため、更に田沢保久の二男安久を迎えて女婿とした。これが恒徳である。

恒徳は寛政八年（一七九六）四月に奈須家家督を継ぎ、六代目久昌院となった。

恒徳は幼時より頴悟で、一九才の時に多紀家の医学館に入って、多紀藍渓、ついで桂山のもとで医を学んだ。しかし、考證学を重視する多紀家の学風に満足せず、奈須家の医祖玄竹が曲直瀬一渓道三の門人であったことから、一渓の学説を祖述し、また本邦医書の研究に従事する志があった。「此国ニ生レテハ自ラ此国ノ風アレバナリ。且ツ祖トスル所ハ一渓先生ナリ。已ニ一渓学ヲ

宗トスル以上ハ唐山ノ書籍ハ一層隔タル趣アリ。夫故ニ国朝ノ医書ニ専パラ心ヲ用ヒタリ」と大胆にその心情を告白して、医官としての出世を断念し、柳島に退隠して、専ら古医書の研究にあたるに至る。

これに先立つ寛政一二年（一八〇〇）には、『棒心方』と題する宝徳三年（一四五一）の中川子公の著書を得て、校正、活版に附している。この『棒心方』校正にあたって、恒徳はすでに師の桂山との間に幾許かの確執があった。この時、恒徳が手に入れたのは『棒心方』の完本ではなかった。桂山が完本を探して、蒹葭堂にあることを知って、これを献ぜしめた。そこで恒徳が借用を請うたが、官物だからとの理由で承知せず、そうこうしているうちに文化三年（一八〇六）三月の火災で医学館も桂山宅も焼け、問題の『棒心方』の完本も烏有に帰してしまったのである。

「余ハ一向ニ、一渓学ニシテ、世上ノ如ク浮気ノ学問セヌニヨリ、雑駁家ノ多紀安長トハ志合セズ。故ニ、官途モ進ムマジク覚エタレバ、三十一才ノ時ヨリ、世上ノ徒ヲ謝シテ、本所柳島ニ門ヲ鎖シタリ。官途ハ安長ガ如ク、雑駁ナル学風ナラネバ進ミガタシ。烏呼哀哉」と桂山安長の権威に正面から対決した恒徳は、右の文にあるように三一才の時、つまり文化元年（一八〇四）に、若くして柳島隠棲というきびしい道を選択するに至ったのである。

この時の心情を述べたものに次の詩がある。

移居柳島

妻子憂予僻　要予省貴権　折腰祇取辱
低首孰垂憐　雖誦筐中册　屢空嚢裏銭
何当償旧債　養拙此終年

恒徳はまた次のようにも云っている。「哀ノ内ニ楽アルハ、此国ノ医書ト、一渓学ノ風ト、人ノセヌコトヲ研究スル、コノ大ナル楽ヤ、世ニ用ヒラレテ、時メクヨリハ、百倍シタル楽事ナリ」。このような決意のもとに、道三を中心とする日本医書の研究に生涯をささげた恒徳は、はたして多くの貴重な業績を遺した。その中でも特筆すべきは、田代三喜が在明中に師事した月湖と称する医師が本邦人であることを推定したことである。

『類證弁異全九集』には、銭塘月湖編著との署名があり、景泰三壬申歳陳叔舒の序文中に「銭塘月湖為二当時之良医一、其声聞二海内一」とみえる。恒徳の説によると、『月湖全九集四巻』は『明史芸文志』に記載がない。また月湖に姓氏が書かれていないのは僧侶であることを思わせる。その文辞より察するに、日本の僧が明に赴て、銭塘に流寓していたものと推察される。本書は景泰三年（一四五二）に刊行されているが、日本人僧侶によって著わされたために『明史』が逸したものであろうというのである。「月湖ハ本邦人ナルコトヲ考ヘ出シテ、予精力ヲ国朝ノ医書ト、一渓学ニ用ヒタル効験アリ。三百年ノ隠晦ヲ発明セリ。是レ生涯ノ大楽ナリ。子孫タルモノ之ヲ思ヘ。吾一渓ヲ尊信スルハ、一向宗ノ親鸞、法華宗ノ日蓮ノ如ク、吾医業宗旨ノ祖師ナル故ナリ。己ガ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook